軍靴の足跡

山梨県 三井 三千雄

徴兵検査

昭和十三（一九三八）年六月の徴兵検査の当日、村の壮丁該当者三十九人は韭崎小学校の検査会場に集合しました。軍医が検査官で補助員を使い、壮丁の体格・内診による総ての検査を終了し、私も甲種合格となりました。役場の兵事係は私の身長が合格すれすれであったためか「三千雄さんが甲種になるかどうかが一番判らぬ」と言っていたのですが、甲種合格と決まって、当時の雰囲気から気持の上でも一歩前進した感じがして、日本男児としての肩身の広い感じを持つことができました。

入 営

この年、昭和十三年三月、私は山梨県立青年学

校教員養成所（現在の山梨大学教育学部）を卒業し就職にありました。兄も師範を卒業し、短期現役兵で六カ月の訓練を受け、伍長で除隊して同じく教職にあり、常日頃軍隊の諸般の事は絶えず私に教えてくれました。特に入営前に軍人勅諭は全文を暗誦し、一字一句間違ひなく書けるようにしておくこと、さらに典範令の綱領を暗記しておくこと等を言われました。私は教職の傍ら着々と之を実行し入営通知を待ったのです。

郷土の歩兵第四十九連隊であれば、学生時代に軍事講習で一週間兵営宿泊も体験したし、知人も何人か入隊しているのですが、これだけは個人の意志ではどうにもならぬこと。そして希望とは異なり入営通知には「北海道旭川第七師団歩兵第二十七連隊に十二月十日入営すべし」とありました。何で北海道へと思っても仕方無い。誰か一緒の人をと探すも全く誰もいない。「何糞、男一匹全力で頑張るぞ、頼るは我が身と心あるのみ、人間至る処青山あり、甲州男児の意気を發揮する

ぞ」と心に誓ったのです。

学校での盛大な見送り、部落での壮行会も盛大に行われました。在郷軍人の代表者よりは「三千雄さんは学校も出ているので必ずや甲種幹部候補となり国軍の将校になつてくれ、村民は大いに期待している」との挨拶がありました。教職の兄は塩山まで同行してくれました。ホームに立つ兄と最後の別れは涙の中に消え去りました。上野駅より一路旭川へと向かいました。十二月の海で青函連絡船は大いに揺れ、函館よりは車中の人となり、札幌を過ぎ軍都旭川に到着、入営者付添いの者も大勢ここで下車し、当日は旭川に一泊でした。

そして入営当日は、旭川駅前より電車にて歩兵第二十七連隊に到着、一同はぞろぞろと営内に入りました。正面は連隊本部でしょう、菊の御紋章が燦然と輝き、日本国の隆盛を表徴しているようでした。集合所は入営者でいっぱいでした。各中隊の人事係は下士官と共に、自分の中隊に入る者

の名前を大声で呼んでいました。私は第一中隊で班長に引率され、軍服に着替えました。軍服は一号から六号まであり、私には六号でも少し大きい位でした。これでやっと陸軍二等兵が出来上がった訳です。

この部隊は留守部隊で、部隊長は印南中佐、本隊は今年一月北満の嫩江ヌルハに派遣され、第七師団司令部はチチハルに在り関東軍の傘下に入っていました。我々も近くここに派遣される要員であることは少しづつ判つて来ました。兵舎の二階の屋根からは丈余の氷柱が垂れ下がり、我々は四種混合の予防接種を胸にして貰つたため、高熱の中、飲みみたい水も我慢して耐えたものです。

渡 満

昭和十三年十二月十五日は我らの渡満の日でありました。小銃も持たず、水筒、帯剣だけで雑囊も背囊も無い、「こんな姿で満州派遣とは」と心細い思いでした。当日、練兵場で留守部隊長の訓示の後、護国神社の参拝を終え、旭川駅に向かい

ました。行軍は延々長蛇の列で、その列に雪はしんと降り掛かり、しかし道の両側には見送る人の波と日の丸と万歳の歓声でいっぱいでした。

我々の輸送中隊の引率は将校一、下士官二、三人で、小隊長の役目をする分隊（班）長は同じ初年兵の中から適当な者が選ばれました。

軍用列車は昼夜兼行で走り神戸に着くまで窓は一切開ける事を禁じられ、神戸に一泊となりました。

翌朝、湊川神社に参拝し、輸送船（山下汽船の貨物船、約四〇〇トン級）に乗船。多くの市民の見送りを受けながら静かな瀬戸内海を抜け玄界灘に出ました。船倉を上下に仕切った仮の船室ですから、立ち上がれない程窮屈なので甲板にたびたび出て体を伸ばしました。日本の島々が水平線に沈むまで甲板から眺めつつ「さらば祖国よ栄えあれ」という感慨に浸りました。

甲板では体操もするのですが、荒れる波濤に船は木の葉のように揺れ、不安定で転んだりしま

す。甲板の仮設トイレはしつかりつかまっていな
いと尻餅をつく始末でした。鱻の群れは船首の前
を横切ったり、悠々と競泳したり見事でした。そ
して船酔いのため食欲がない、ところが浜出身の
初年兵は「うまいうまい」と言って毎食たらふく
食べていました。四日間の船旅を終えて、十二月
二十三日、大連に上陸しました。

大連は吹雪で、その中で満人が馬車に石炭を満
載し、真っ黒の顔で馬をムチで御していたのが印
象的でした。そして大きな倉庫に入れられ、その
晩はここで毛布をかぶり雑魚寝でした。翌朝、貨
物列車に乗せられ、満州の広野を北へ北へと走り
に走り続けました。この列車も内部は上下に仕切
り、数十人を詰め込むので窮屈も甚だしい、貨車
の戸は締め切つてあるのでどの辺を走っているの
か皆目見当がつかぬ。寒気は容赦無く忍び込んで
来る。お互いに身の上話や軍歌の合唱などをしま
した。到着前に防寒被服一式が支給され、これを
全部着ると達磨だるまさんのようで、転んでも起き上る

のが大変でした。

嫩江到着

旭川を出発してから十二日目の十二月二十六日夜、目的地の北安省「嫩江」に到着しました。嫩江は寒いことでは満州で一番と言われるだけに、下車した瞬間寒さが痛烈に体に刺し込んで来ました。駅には駐屯地から多くの先輩達が迎えに来ていました。寒さは零下三〇度を遙かに越していると感じました。「二中隊、二中隊」と呼ぶ声の方に行くと言部や先輩達がいて、「足踏みをしろ、手をこすれ、鼻を氷らすな」と怒鳴り声で我々に注意を促しつつ、一方では人員を確認した上で「よく来たな、待っていたぞ」とやさしく迎えてくれました。

「出発!」「離れるな!」と号令が飛びつつ、兵営まで約二キロを行軍しました。積雪は深くはないのですが一歩進んで半歩戻る感じで、約一時間位で営門をくぐり第二中隊の舎前に整列し、中隊全員の出迎えを受けました。既に深夜十一時過

ぎでした。

私は第一内務班で班長は飛田軍曹、戦友は讚井上等兵である。夜、初年兵全員に飲ませてくれた熱い甘酒の味はいまでも忘れられない思い出です。内務班はペーチカで暖かく、整頓棚には私の名前が貼り紙しており、官給品も揃っており、手廻しの良いのに感心しながら嫩江の最初の眠りについたので。

軍旗に敬礼

一夜が明けた翌二十六日は、各中隊の初年兵は連隊本部の雪の広場に整列し、ラッパに合わせ遠くから「軍旗に敬礼!」で、もう房しかない歴戦の武功を語る軍旗を初めて拝し、この軍旗の下に死力を尽くすのだと心に誓ったものです。そして旅団長森田範正少将、連隊長宮沢斉四郎大佐の訓示がありました。私はこの訓示を一言一句聞き洩らすまいと頭に入れました。昼食には、お祝の御馳走が出ました。夜の点呼時に、内務班長より連隊長の訓示の要旨を聞かれて、これに答えられた

人は数人でした。

初年兵教育

一期間の教育の成果は、その人の軍隊生活の一生を支配するので全力を傾注して頑張れと兄は入隊前、よく私に留意するよう言っていました。初年兵教育の目標は一期の検閲である。これに向かい内務に、学科に、術科に教育訓練は加速して行なわれました。兵の三技とは「行軍」「射撃」「銃剣術」で絶対誰にも負けてはならない。私は中等学校に通学する頃、往復八キロの道を毎日歩き、休みには家が農家の関係で重い物を背負って歩いたので行軍に落伍は一度もしなかつたし、二年兵より「お前はゴムマリを転がすようによく歩くなあ」と褒められたものです。

射撃も学生時代、県下の中学校の射撃大会が第四十九連隊の射撃場で行われ、私は優勝し、第四十九連隊長より賞状と馬蹄形のコメツキの文鎮を戴き、配属将校原大尉よりも大変褒められたことがありますので軍隊でも射撃の成績は上位でした。

た。銃剣術も常に機先攻勢で試合には初一本で勝ち、教官が私を台の上上げて「もしソ連と戦わば、このように機先攻勢で勝たねばならぬ」と一同の前で褒められました。

中隊長の精神訓話は毎週月曜日の午前中、二個班がぶつ通しの部屋で、初年兵は真中で、周りには将校以下全員が集まり、正に衆人監視という中で行なわれました。私は一番前で中隊長を見上げながら聞いていました。中隊長は話の中で時々質問をする。初年兵は皆手を上げるが答えられる人は少ない。私はほとんど答えてしまうので次第に私には当てなくなつたものです。中隊長の話は入隊前に私は学校で勉強してあるので良く理解できなからです。

この精神訓話は初年兵の能力テストでもあったのです。私は班長の洗濯をした事は一度もないと記憶しています。それはまず自分の事と戦友の事でいっぱいであり、目の廻るような秒読みに等しい生活の中で、思いながらもそこまでは手が届か

ぬからでした。逆によく班長室に出入りして洗濯している初年兵は、自分の事は放任し、自分の洗濯物などは藁布団の下に突込み、演習より帰って見ると週番上等兵に発見され大変油を絞られていました。

師団長園部和一郎中将は將兵に対し「表裏無き懸命の努力せよ」と言われましたが、私は身をもって之を實行しました。厠に行くにも手ぶらでは行かない。自分と戦友の軍靴や洗濯物を持ち、或は掃除バケツに雑巾を持つてそれぞれ用事を済ませ内務班に帰るといふように、一步の足でも無駄が無いように努めました。

また初年兵には一期の検閲終了までは外出も無く酒保にも行けません。日曜日には便所掃除、冬は凍った糞を鉄棒で砕き、筵に乗せて雪の上を遠くまで捨てに行く。氷の破片は顔等に飛び散り、解けて臭気を発散してくる。これも軍務の一つであれば何でもない。「天網恢々疎にして漏らさず」、神も上官も我が心の中に常に宿っている、これを

欺く事はできない。思わぬところで上官とばったり合う事は度々ありました。

訓練、演習は日毎に激しくなり、炎暑の中をまた酷寒の中を長い行軍に耐え抜きました。行軍の時は物入れに典範令を入れ、歩きながらも暗誦しました。教官の松里少尉は教育熱心で、行軍力は抜群で良き教官でした。助教は高橋軍曹で中隊で最優秀の下士官であり軍紀厳正、曲がった事は絶対に許さない人でした。演習は広範囲で習得する科目も多く、これらを総て自分のものとせねばならないのです。

北滿にも漸く春が訪れ、寒さも和らぐ頃、第一期の検閲である。入隊以来寝食を忘れた教育の成果の見せ所でもあるわけです。検閲官は連隊長で補佐官は何人かの将校が分担し、全科目につき夜となく昼となく検閲は続きました。中隊の成績は上位に評価され、中隊長以下ほっとしました。

そして、四月一日付で一等兵に進級しました。中隊の初年兵五十人中、約二十人位が一等兵

で、私は一等選抜で進級者一同と中隊長に申告をしました。

幹部候補生

連隊の初年兵は北海道出身者と第一師団（東京・千葉・神奈川・山梨）からの初年兵が半々位で、第一師団からは幹部候補生の有資格者がほとんどでした。一等兵進級後、間もなく、将校集会所で第一日目は筆記試験、第二日目は口答試問（面接）である。有資格者（受験生）は約二百人位いました。皆真剣で必死でした。各中隊よりは受験生の一期間の成績は本部に報告され、何日か経って合格発表があり、発表の結果一選抜で私は合格したのには驚きました。合格者は約五十人位でした。

いよいよ幹候の集合教育である。この教育の結果、甲・乙に区分され、甲は将来将校に、乙は下士官にと前途は分かれるのです。教官は本部付で連隊旗手の中津川少尉（後年、陸大を恩賜の軍刀組で卒業、終戦時はインパール作戦の参謀で戦

死、山形出身）、助教にも優秀な軍曹二人が付きました。学科も術科も国軍の幹部としての資質の研磨向上に重点をおき、どんな小さな違反行為も許さない厳格な教育でした。

学科も術科も着々と進み、夜は将校集会所にて昼の疲れも忘れて深更まで皆一心に勉強を重ねました。反省録も毎日書き、教官の検閲も受けました。候補生は互いに切磋琢磨し、身も心も磨いていきました。

春は馳足できて、大草原は一面に迎春花のお花畑と化し、大陸の夏も訪れる七月十五日、一泊の野営訓練を終え営内に入った頃、「将校馳足集合戸」のラッパが鳴り渡り営内は時ならぬ空気となりました。「応急派兵」の下令でした。いよいよ我々も第一線で存分に戦える時が来たと闘志が湧き上がりました。

命令では「連隊砲、速射砲は明朝出発。各小隊の第三分隊と幹部候補生は残留し駐屯地を守れ。本隊の出発は別命」とのことである。待機中も教

育訓練は続行されました。

いよいよ本隊は八月十四日出発。嫩江駅に午前十一時五十分、候補生は上官や戦友を見送るも別れは辛く、ただ武運長久を祈るのみでした。残留者は衛兵勤務や警備、使役に多忙を極めました。

前線からは激戦の情報が刻々届き一喜一憂の毎日でした。候補生の教育はほぼ終了していたので甲種、乙種の合格発表を待つだけでした。九月十六日停戦の情報にはっとしました。

九月二十八日、本隊からの命令で甲種幹部候補生二十五人の発表があり、私はまたもや一選抜で決まり、嬉しいやら、一方ではその重責を痛感しました。

思えば入隊以来、死力を傾注し表裏なき懸命の努力をした甲斐があった。その夜は嬉しくて一睡も眠れなかったものです。そして留守部隊長に申告しました。盛岡陸軍予備士官学校への入校は十一月一日である。出発まで勤務は続行しました。出発に際し留守部隊長に申告、部隊長よりは「途

中絶対に事故を出すな、万一事故を出せば全員元の階級に格下げする。連隊の名誉にかけ頑張れ」と激励され、残留者の見送りを受け、思い出の駐屯地を後に車中の人となりました。

安東、新義州を通過、朝鮮を経由して釜山着。台風で連絡船欠航につき船中に一泊し、盛岡陸軍予備士官学校には十一月一日に入校しました。その時は伍長の階級でした。

盛岡陸軍予備士官学校

盛岡陸軍予備士官学校は盛岡市の西北、岩手山南麓に広がる雄大な観武ヶ原練兵場を持つ立派な校舎でした。校長は岡本保之少将。生徒隊長は前半は田坂八十八大佐、後半は尾本喜三雄大佐で、我々の第一中隊長は松尾少佐、区隊長は杉浦大尉でした。

各連隊から選抜された甲種幹部候補生千二百八十五人が入校しました。一般中隊は四個中隊、機関銃、歩兵砲、通信の各中隊計七個中隊で、中隊は四個区隊編成でした。第一中隊は近歩第三、歩

兵第二十七、歩兵第三十二、歩兵第五十、歩兵第五十七、歩兵第七十の六個連隊よりの候補生でした。

「以死必勝」の旗印の下、切磋琢磨、将校生徒の自覚の下、術科にまた学科にと励みました。習志野、金丸原、山田野等の演習場でも各種の演習を実施し、指揮能力の向上に努めました。「兵よりも下士官よりも先に第一線に出よ」と我々野戦小隊長は国家の消耗品ともささやかれたものです。

卒業演習は幾昼夜、全身全霊を投入し、その極限まで戦って無事終了しました。

二月一日に軍曹、卒業は六月二十七日、同時に曹長の階級に進み見習士官を命ぜられ、第二十七連隊出身者二十五人を引率して旭川の原隊に帰り連隊長に申告しました。その時、満州駐屯およびノモンハン戦の本隊は旭川に帰隊していました。

将校勤務

見習士官は連隊の花とも言われ、若さと希望に

燃えて教育訓練・勤務等に専念し、昭和十五年十一月一日、陸軍少尉（正八位）に任官しました。この頃補充兵が入隊し、その教官を命ぜられました。年輩者ではありませんが、皆一生懸命励み、検閲も無事、好成績で終わり、将校戦術、現地戦術、週番勤務、第一種、第二種巡察等は多く教育訓練の間に行なわれました。

また上陸演習も真剣に行われました。その頃は既に南方作戦の準備でもあったのです。二十五人の同期は見習士官の頃より外地に転属し、連隊に残ったのは私以下五人位でした。

東京陸軍少年飛行兵学校付に転出

歩兵から航空へ、夢想だにしなかったことです。連隊長も掌中の玉を取られた感じだと思っています。本部の機密図書を許可を得て調べました。

それによると、この学校は日本に唯一つの陸軍航空の幹部を養成する学校で、

「生徒は志願で来る年令十四〜十五歳の少年

で、毎年四月一日（前期）千五百人。十月一日（後期）千五百人、計三千人が入校し、一カ年間に軍の幹部となる素地を養成し、卒業時、操縦、通信、整備のそれぞれの上級学校に進み……」

「中隊は十五個中隊で四区隊編成、区隊長は少中尉……」と書いてあります。一週間以内に新任務に就かねばならぬこととなりました。

思い出の旭川とも別れ、学校の所在地である東京都北多摩郡村山村（村山貯水池の近く）に行きました。正面が学校本部で菊の御紋章が輝いていました。校庭には白の体操衣袴、白の帽子の陸軍生徒が、午後の自由時間であろうかフープに、鉄棒に、マット運動等の練習をしていました。大変な所に転任したと心の中で思いました。私は第十三中隊第四区隊長と決まり、着任後間もなく命下布達式が挙行されました。今回赴任者は全国から五人の少尉でした。

第十三中隊長は近藤大尉で、申告を済ませ区隊長室に行き先輩の各中尉に挨拶しました。前任の

荘司中尉よりいろいろと指導も受けながら任務に就きました。学校には文官に判任文官、高等文官がいて、普通学（国語、数学、歴史、科学など）は時間割により教える。区隊長は五十人の生徒の責任者で、軍事学全般と体操、剣術、教練、演習等を教育、幹部となる素地をしつかりと教育するのだとの事です。「よし、死に物狂い新任務に励もう」。新しい勉強もし、先輩の指導も受けながら一年間は必死で学びかつ教えました。

生徒は全国何万人の中より選抜された頭も体も立派な生徒で教え甲斐があり、魂と魂の教育をし、第十一、十三、十五、十七期の生徒を教えました。その頃には学校でも古参の区隊長となり、転勤して来た中、少尉の教育を一定期間命ぜられ、終了後には各中隊に配属するようになりました。私は教えた生徒が作成した学校の思い出の文の中に「短駆なれど教育熱心で教育が上手、しかも人間味がある。我々は良き上官に恵まれた」と書いてあり、今でもこれらの多くの人と文通して

います。

昭和十七年八月二十日、中尉（従七位）に進級しました。昭和十九年八月十五日、中尉一等級。

宇都宮陸軍飛行学校付（中隊長要員）です。

戦局は日増しに激しく、航空決戦の火花を散らす頃で死力を尽くし訓練していました。この頃、毎日のように艦載機の機銃掃射を受けました。中隊長は欠員無く、本部付で見習士官の教官をも命ぜられました。

昭和二十年三月、常陸教導飛行師団司令部付を命ぜられた。勤務隊長として司令部内外全般の諸々の任務を行ったのです。

甲府の玉幡飛行場は空中戦の時、燃料、弾薬の補給基地となるので、この飛行場の偵察調査を命ぜられ、少年飛行兵出身の操縦士の操縦に依り調査して、師団長に報告したのですが、その直後、私に第六航空軍司令部参謀部付の命令が来ていました。

第六航空軍司令部

米軍は物量にまかせ沖縄に上陸、牛島中将以下防衛の我が軍は死力を傾注して激戦をしているのでありました。第六航空軍は沖縄を救援のための航空軍であり、九州はもう既に第一線となっていました。それで生還を期せず、将校行李一個持つて赴任しました。

司令部は福岡高等女学校にあり、軍司令官は航空士官学校長の菅原道太中将で、各参謀にもそれぞれ申告をしました。

私の勤務場所は情報班でした。班長は伊丹少佐で部下は松脇大尉、吉沢大尉と私・三井中尉、見習士官の井上、浅尾さらに戦隊からの派遣の伊勢野、原の計八人でした。情報には一刻の休みも無い、毎夜十二時過ぎまで勤務し、時には徹夜の時もありました。作戦のための諸情報を集め調査し、参謀の作戦の資料を作るのである。或は参謀の問に答えられるように絶えず準備も怠らない必要があります。

海軍は鹿児島鹿屋に第五航空艦隊司令部があり、やはり沖縄の救援作戦を行っていました。そして陸海軍は緊密な連絡の下に共同作戦を実施していました。

例えば米軍に占領された飛行場の滑走路の延び具合、飛行機の機種、数量、諸施設の状況。港については艦船の数、艦船の区分種類等を交互に偵察撮影した航空写真を引き伸ばし、拡大鏡で詳細に区分判別し、これ等を統計に数字にグラフ等に作成し、参謀に報告、並びに海軍の第五航艦にも連絡するのです。

第六航軍より海軍の第五航艦には青木参謀副長（少将）が行っており、補佐役に宮本中尉が同行していました。宮本中尉の交代に誰が行くか、結局私に命令が出ました。「三井中尉は宮本中尉の交代として青木副長閣下を補作し作戦連絡に任ずべし」との事でした。

七月七日、福岡飛行場（雁ノ巣）に午後到着、機上の人となりました。操縦者は准尉で通信と無

線の計三人と私の四人で双発高等練習機は鹿屋に向かい舞い上がりました。途中第六航軍の住参謀が命令伝達して帰るのと空中で会い、翼を振りお互いに挨拶をしつつ、我が機は一路南に飛んだのです。無残にも焼かれた諸施設、弾痕多い飛行場が見えて来ました。辛うじての着陸です。飛行機は私を下ろして知覧へと飛び去りました。

海軍の司令部は山の中腹に大きな穴を掘り、コンクリートで固め堅固にできていました。司令官宇垣中将、陸軍の青木少将等に申告しました。この司令部の中はデパートのようで、中央に通路があり、その両側に諸施設が完備し、明るい電灯の下、各部署に将校、兵等が忙しく働いていました。また知覧、志布志、万世、都城等より的高等女学校の上級生も電話当番等に勤務していました。

海軍の中尉、少尉は平素はガンルームに居ます。私もここや青木副長の所で勤務しました。暗号の解読、敵の通信の傍受、我が軍の特攻隊の攻

撃状況とその戦果等々、それぞれの部署で総てキヤッチしているのです。これらを急ぎ取り纏め、その報告や処理には多忙を極める毎日でした。

司令部は緑の木々に囲まれ、監視哨も各所に設置され、二十倍の眼鏡で見ると向こうの監視哨の行動も遠くの空飛ぶ鳥も手に取るように判ります。空襲も度々受けました。

転 進

一カ月近く勤務した鹿屋の司令部は、七月三十日、大分に転進することとなり、ガンルームのキヤップ小作中尉以下将校、下士官、兵、挺身隊等約九十人の一行は鹿屋より乗車し都城に到着しました。日豊線は爆撃で不通のため、熊本廻りで行くことに決しました。車窓より見ますと、防衛部隊も我が軍の陣地も各所に点在しているのが見えます。これらは敵の上陸に備えてのものでした。

翌朝六時半頃大分に到着しますと、ちょうど敵

機の来襲があり、急いで下車、退避しました。

大分にも既に鹿屋と同じ司令部の設備が出ており、直ちに各々の任務を続行しました。広島、長崎への原爆投下があり、ソ連の参戦と満州に侵攻等も加わり、海軍は陸軍の私に「満州は」「ソ連は」と質問攻めでした。

終 戦

八月十五日正午、司令部内の一室に長官以下全員集合し玉音放送を聞きました。「戦い我に利あらず。忍び難きを忍び、万世の為に太平を開く……」一同肅として声無し。司令官宇垣中将は「多くの部下を特攻隊員として送り出し、申し訳無い」と言つて、参謀の制止を振り切り、自ら沖繩特攻に征つたのもこの直後のことでした。

矢弾尽き果て、戦いに破れたりと言えども、建軍以来光輝ある我が陸軍の終焉は、立派に花を飾らねばならぬと思いました。そして青木少将と連絡機で福岡の第六航空軍に帰りました。司令部は山の中の三角兵舎で、早速、残務整理に取り掛か

りました。マッカーサー命令で航空関係は八月末までに解散せよとのことでした。

私は司令官をはじめそれぞれの方々に申告し、長野県出身の吉沢大尉と駅近くの墓地に野宿、翌日大混乱の列車に乗り、広島原爆の跡を見ながら焼野原の甲府の我が家のバラックに復員しました。